

## 分娩後早期定時人工授精の有効性を現地試験でも実証！

分娩後早期における定時人工授精（TAI）は、酪農家の現地試験においても、初回授精受胎率の向上や初回授精不受胎後の再発情における受胎率の向上が認められ、分娩後105日以内に受胎する牛の割合が向上したことから、県内酪農家での積極的な実施が期待される技術である。

### 内容

本誌No.204号とNo.208号にて、ホルモン製剤により排卵と人工授精のタイミングを合わせるTAIを分娩後早期から実施することで、乳牛の繁殖性向上につながることを報告した。本号では2戸の酪農家における現地試験の結果を報告する。

繋ぎ飼養のA牧場（対照区13頭、試験区11頭）とフリーストール飼養のB牧場（対照区52頭、試験区36頭）において、試験区牛に対して、分娩後74-80日目にOvsynch + CIDR法（図1）によるTAIを実施した。対照区は通常の繁殖管理を実施し、両区の繁殖成績（平均初回授精日数、初回授精受胎率、初回授精後の再発情発見率及び受胎率、分娩後105日以内に受胎した牛の割合）を比較した。

A牧場では、試験区は対照区に比べて平均初回授精日数が早い傾向となり、初回授精受胎率は対照区の23.1%に対し、72.7%と顕著に高い成績が得られた（表1）。B牧場では、両区の初回授精受胎率に差は認められなかったが、初回授精不受胎後の再発情における受胎率が試験区で77.8%と高く、その結果、分娩後105日以内に受胎した牛の割合は44.4%と、対照区の18.4%に対し有意に高い成績が得られた（表2）。TAIにより発情周期が適正化されたことで、再発情における受胎率の向上につながった可能性が考えられる。以上のことから、酪農家における現地試験においても、分娩後早期TAIの有効性が確認された。

### 今後の方針

分娩後早期TAIの有効性と効果的な活用法を酪農家及び指導機関に広く周知し、県内酪農家の繁殖成績の向上につなげる。

石川 翔（淡路 畜産部）

（問い合わせ先 電話：0799-42-4883）

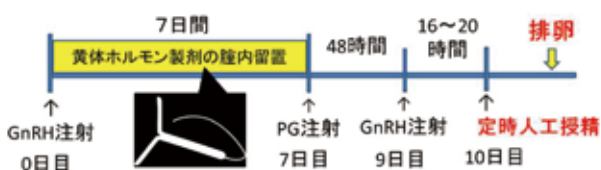


図1 Ovsynch+CIDR法の概要

表1. A牧場の繁殖成績

	対照区	試験区	p値 <sup>3)</sup>
平均初回授精日数(日)	104.8 ± 64.1	77.7 ± 2.1	p=0.153
初回授精受胎率(%)	23.1 (3/13) <sup>1)</sup>	72.7 (8/11)	<b>p=0.015</b>
再発情発見率(%) <sup>2)</sup>	30.0 (3/10)	33.3 (1/3)	p=1.000
再発情における受胎率(%)	66.6 (2/3)	0.0 (0/1)	p=1.000
105日以内受胎牛割合(%)	7.7 (1/13)	72.7 (8/11)	<b>p=0.010</b>

<sup>1)</sup> 分娩後105日以降に初回授精を実施した牛も含めて算出

<sup>2)</sup> 初回授精で不受胎だった牛の内、再発情を発見した牛の割合

<sup>3)</sup> p<0.05を有意差ありとして赤字で示した

表2. B牧場の繁殖成績

	対照区	試験区	p値 <sup>3)</sup>
平均初回授精日数(日)	81.4 ± 40.4	77.1 ± 2.6	p=0.443
初回授精受胎率(%)	15.4 (8/52) <sup>1)</sup>	19.4 (7/36)	p=0.619
再発情発見率(%) <sup>2)</sup>	36.4 (16/44)	31.0 (9/29)	p=0.639
再発情における受胎率(%)	25.0 (4/16)	77.8 (7/9)	<b>p=0.011</b>
105日以内受胎牛割合(%)	18.4 (9/49)	44.4 (16/36)	<b>p=0.009</b>

<sup>1)</sup> 分娩後105日以降に初回授精を実施した牛も含めて算出

<sup>2)</sup> 初回授精で不受胎だった牛の内、再発情を発見した牛の割合

<sup>3)</sup> p<0.05を有意差ありとして赤字で示した